海外博物館事情

—Ancient Salt Cracow Salt-Works Museum—

中　原　住　雄

Ancient Salt Cracow Salt-Works Museum

私がこの博物館（岩塩鉱山採鉱跡）を初めて知ったのは、建築学科の桜井先生との会話の中からであった。1988年の10月にポーランドで開催される国際会議に参加するので、以前に訪問されたことのある先生に、その年の夏、ポーランドの国情や市民の様子を尋ねた。そのやりとりの中で分かったのは、"ある学会のレセプションがその地（鉱山内）で開かれたとのこと。それは地底百数十メートルにある大ホールで行われた。そのホールのシャンデリアは塩の結晶で出来ており、付近には地底湖もあり、すばらしい所"ということであった。しかし、残念なことにそれが何処に位置するかという情報は得られなかった。ただ、古都クラコフの近くというだけであった。

私は、その年（1988年）、学会に参加したあと、一度この博物館の訪問を試みたが、正確な場所が分からなかったのと、まだ東ヨーロッパの自由化の嵐が吹く前だった上、時間的なゆとりが無い等の悪条件が重なり、クラコフさえ行けず、結局探し出すことが出来なかった。それゆえ、昨年、在外研究の後半にポーランドの訪問の機会を得たとき、ぜひともこの地を捜し、訪れてみようと思った。

クラコフに行ってみると、自由化後のせいか以外にも簡単に見つけることが出来た。この博物館のある小さな町はヴェリチカ（Wieliczka）といい、古都クラコフ（Kracow）の南東14kmに位置する。

この鉱山はカルパチア山脈の塩鉱脈の一つであり、ポーランドの塩の採鉱について700年以上の歴史を例証している。この地ヴェリチカはヨーロッパにおいて記録に残る最古の塩の生産地であるとともに、ヨーロッパ最古の採鉱構造物の一つである。13世紀の後半に岩塩が発見されて以来、今もなお、この鉱山は採鉱されている。7世紀に渡るヴェリチカ鉱山からの採掘量は、7.5百万立方メートル以上にもなり、地表下64メートルのレベル1から327メートルのレベル9まで掘り下げられている。その鉱山は2040もの採鉱窟、総延長200キロメートルもの坑道、26の地表と坑道をつなぐ縦抗、約180もの各レベル間をつなぐ縦抗などからなる。注目したものとしては、木枠で保持されている驚くほど大きな採掘抗跡、地下に造られたいくつかの祭壇、それに地底湖、また、機械工学屋として注目すべきは、縦抗の昇降用の木製の機械を含む様々な採掘用の道具などである。この博物館の科学的な価値のあるものとしては、鉱山の詳細なマップ、考古学的・地質学的所蔵品、芸術及び民族学的所蔵品、また同様に、塩の生産・採掘に関する有形文化の残存構造物等がある。現在、一般に公開されているのは、地下レベルⅠ（地表下64m）からレベルⅢ（135m）の長さ2kmに渡る採掘跡とレベル3にある展示品の数々である。これらのルートは鉱山全体の2％にすぎない。この鉱山の一部は、1976年ポーランド国内で遺跡（National Monument）として、リストアップされ、1978年には国連教育文化機関（UNESCO）によって、World Cultural and Natural Heritageの一つとして指定された。その中の興味があったいくつかを紹介しよう。

The Janowice Chamber

この部屋（採鉱窟跡）は17世紀前半に開拓された。ここの一角には実寸大の複数の人物像が置かれている。それらはポーランドとハンガリーのナイト、それと3人の坑夫達である。これらの像はこの鉱山の伝説を表現している。この伝説によると、「ハンガリーの王様ベラ四世の娘キンガが、このクラコフ・サンドミールズ州のポーランドの王子と結婚をすることになった。彼女は婚約者の国について調べ、彼の国が裕福だが塩が無いのを知ると、彼女の父にハンガリーのマラミュール地方にある鉱山の一つをくれ

るよう頼んだ。彼女の父が悦んで願いを聞き入れると、彼女はさっそくその鉱山に出かけ、彼女の所有の証として、その鉱山の縦坑に婚約指輪を放り投げた。ポーランドに嫁いだ後、彼女はクラコフの近くに縦坑を掘るよう命じた。すると、豊富な塩の堆積が見つかり、さらになんと最初に発見した塩の塊の中からその王女の婚約指輪が見つかった。その指輪は彼女に伴って塩とともに、彼女の夫の国まで地中を旅した。」ということである。写真はナイトが塩の中から見つかった指輪を王女キンガに示している様子を表している。

The Blessed Kinga Chapel

このチャペルは写真を見て分かるように、この鉱山の中で最も大きくかつ最も華美なものである。これは1896年に開設された。そのサイズは高さ10〜12m、長さ54.5m幅15〜18mもある。こんな大きなホールを地下百数十メートルによくも造ったものだと感嘆した。周りの壁にはいろんな彫刻が施されており、塩の結晶を使ったシャンデリアとともに、このチャペルの優美さを表すものであった。その彫刻の一部は1900年に開催されたパリの世界博覧会に出展されたそうである。

1918年このチャペルには電気が引かれ、特長ある塩の結晶のシャンデリアは電気用に直された。現在このチャペルはコンサートホールとしても使用されているとのことである。

The Staszic Chamber

この部屋は1871〜1914年にかけて採掘され、高さ50mにもなり、レベルIIとレベルIIIの両方の空間をも占有していたが、今は、部屋の下の部分が埋められ、部屋の高さは36mになっている。この部屋はナチの占領下の間、1944年7月ドイツ人によって飛行機の組み立て工場にしようと試みられた。この労働力は主に強制的に集められたユダヤ人に課せられた。ところがソビエト軍の進行により生産が開始される前に、これらの装置は分解、引き上げを余儀なくされたそうである。

The Modena Chamber

A horse gear used for vertical haulage

これはホースギアと呼ばれるもので、主に縦坑道を使って荷物などを上げ下げさせる大型の機械である。このタイプの機械は材質こそ違え、今でもこの鉱山で使われている。この種の機構は17世紀の前半には使われていた。最大2トンまで負荷に耐えられ、1日に100トンまで運搬可能だったそうである。

いま振り返って思い起こすと、実際の見学がガイドに連れられて行くため僅か2時間半と、じっくり見ることが出来なかった。できるなら今一度一人でじっくりと見学してみたいものである。

The Modena Chamber
A horse gear used for vertical haulage

The Blessed Kinga Chapel